



エリザベスオリバーさんが率いる英国のシェルター見学ツアーに、私はアークのスタッフとともに参加することができました。この旅ではヨーロッパ最大のドッグショー“Crufts”への参加と、英国にある5つのシェルターを巡ることが予定されており、私たちは英国の動物事情に日々驚きの連続を隠しきれないものとなりました。この大きな二つを体感することは、動物福祉の先進国・英国の画一をされつつある理想の形を私たちに認識させるものであり、とても考え深く、貴重な経験を与えてくれる旅となりました。

最初に訪れたバーミンガムでは、世界各国からチャンピオン犬を競うビッグイベント・クラフトで4日間を過ごし、愛犬と共に世界中から集まった各犬種の最高峰を競う人々と、それを楽しむ一般来場者の双方と触れ合うことができました。クラフトの会場で最初に感じたことは、その規模の大きさ。犬種ごとのペディグリーショー、人と犬と一緒に踊るダンスショー、アジリティやフライングボールなどのスポーツイベント、ワーキングドッグによる実演などを行うフィールドや、各地から出展されるDOG関連グッズの販売やシェルターなどのショップ&チャリティーブースが5つの会場にひしめき合い、人と犬との熱気溢れる会場での時間は、あっという間に過ぎていきました。

入り口付近で最初に目に留まったのは、何台も並ぶ電動車椅子。公共のスペースでは障害者や健常者が同じ目線で行動できる環境の充実とそれを普通に受け入れる社会の意識がありました。例えば、旅先で入手したフリーマップには必ず障害者が利用でき

るトイレなどの施設表示があり、階段の傍にはリフトもしくはスロープがあり、門扉の幅は大きく、障害者が通るときには健常者がフォローをする姿を多く見ることができました。英国では動物だけではなく、あらゆる弱者に対するハード・ソフト面での体制が整備されていることを実感させられました。

イベントに参加する人々は、トップペディグリーを競う（とてもお金持ちそうな）ファミリー、仲むつまじい年配のご夫婦、赤ちゃんを連れた家族連れなど、様々ではありましたが、人が犬と接する方法を様々な形で学べる環境がそこにはあり、またそれらは一貫して、人本位ではなく犬を尊重した振る舞いを感じさせられるものであり、犬と接する人々の高いモラル意識を感じることができました。

ペディグリーを競う＝純血種の未去勢・未不妊の犬たちが揃うという意味にも取れる訳ですが、会場は殆ど臭い（マーキングなどをする犬）はなく、また犬同士のトラブルを見ることもなく、決して飼い主や犬同士がそれを避けようと努力しているような姿もなく…。これが“しつけが行き届く”という意味なのだとここへ来てはじめて理解しました。（但し、雄と雌の参加日は分けてありましたが、それはあくまでも参加する犬たちの集中力を高めるためのものであると関係者の方は話しておられました。それでも一般来場者は様々ですから、トラブルがあっても不思議ではないのに、そのような光景は一度も見ることがありませんでした。）また、各ホールには、犬と飼い主が休むブースがあり、そこには壁ひとつを隔て、同犬種の犬たちが休んでいるのですが、（オーナーはお買い物で留守にしているの

でしょうか？）取り残された彼らはノーリードでも何の問題もなく其処にいて、一心にオーナーの帰りを待っていました。そこには飼い主と犬との深いコミュニケーションシップを窺うことができました。

この大きなイベントには、英国全土は勿論のこと、様々な国の人々が訪れ、終日行われる楽しいゲームに絶えず笑顔を見せていました。夕方になると駐車場へ向かう長い人と犬の行列、犬と共にバスに乗り込む人々、タクシーへ当然のように犬と乗り込む人々。ここには人と犬との共生が存在している本当に素晴らしい世界がありました。

私たちはクラフトの感動を後にし、ホネリーにあるNCDL（ドッグストラスト）、コッツウォルズのブルークロス、ケンブリッジのウッドグリーン、そしてロンドンのパタシー、ヘイワード・ヒース近郊のナショナルキャットセンターへと5つのシェルターに足を運びました。

ペットと同様に野生動物（馬・羊・小動物）なども受け入れる施設や、猫のみのシェルターなど、それぞれに特徴がある施設を訪れた訳ですが、すべての施設において言える事は、広大な敷地を所有していること、利便性（交通アクセス）がよいこと、施設で保護している動物たちの預かり期間がほぼ2ヶ月足らずで新たな飼い主が見つかることなど、日本では到底考えられないアニマルコントロールが画一されていることでした。それを可能にしている要素として、法（行政と法制度のバックアップ）・人（民間の協力とボランティアによる人的支援）・資金（個人や企業による金銭的支援）という3つのバランスが非常によく取れていること、また、それを実現するには、自然や動物と共生しながら幸せに暮らすことへの取り組みについて、真剣に考える人々の存在が非常に多く必要なことを随所に感じさせられました。

しかし、実際にはシェルターの数や施設が受け入れる動物たちの数の多さを見ると、決して動物たちを手放すオーナーが少なくはないことを物語っています。（ドッグストラストだけでも全英で15箇所も存在します！）手放す原因として多いのは、①離婚 ②飼いたくなくなった ③子供ができたという理由が、どのシェルターにおいても圧倒的だそうです。この辺りは、各国を見ても殆ど変わらないことが理解できますが、英国の飼い主とシェルターの意識が非常に高いことが理解できる事柄として、①動物を手放したいという飼い主は捨てるのではなく（ライフチップによる個体識別が定着しているので遺棄しても飼い主がすぐに判る仕組みが整っているため）、殆どがシェルターへ連れてくること、そしてシェルターは手放したいという飼い主に対し、（不幸せな環境に置かれていた動物